

ネパールの観光都市ポカラにおける有機農業の現状と展望

青木 美紗

キーワード： 有機農業、ネパール、開発援助、NGO、都市と農村、持続可能な社会、観光

1. 本論文の課題と方法

後発開発途上国に指定されているネパール民主連邦共和国の観光都市であるポカラにおいて、近年、有機農業・農産物に関する取組が見受けられるようになってきた。被援助国であるネパールでは、外国の援助機関や I/NGO がそれらに関係していることが多いが、観光都市ポカラでは、外国人観光客も大きく影響していると考えられる。本論文では、このような状況下のポカラやその周辺農村において、有機農業・農産物に関する取組がどのような主体によって、いつから、どのような形態で、何を目的に行われているのか、また有機農産物の流通状況を現地調査によって明らかにするとともに、国レベルの政策における有機農業の位置づけを理解した上で、ポカラや周辺農村での有機農業・農産物の現状を明確にし、その役割と展望を考察する。

2. ネパールの農業と有機農業

ネパールにおいて農業分野は、GDP の約 3 割、労働人口の 6 割以上を占めており、国の基幹産業となっている。都市と農村の格差が拡大する中、農業分野は貧困削減を達成するための重要分野と考えられ開発政策が進められてきた。1960 年代から、ネパール南部や都市部において殺虫剤や化学肥料などの化学的投入物の使用が普及し始め、食糧増産への貢献が期待された。しかし、交通の発達していない山地・山岳地域や貧しい農家は現在もなお、家畜・作物一体型の伝統的農業を行っており、化学的投入物による食糧増産には限界がある上、世界的な環境問題や食糧問題、経済問題が顕著になるにつれて、ネパールの農業もそれらに適応させなければならなくなってきた。このような中、有機農業は持続可能な農業を達成する手段のひとつとして広がりつつある。

3. ポカラにおける有機農業の取り組み

自然環境に恵まれたポカラでは、援助機関や I/NGO によって有機農業事業が推進されているが、輸出を目的とした単一栽培型と環境・健康・経済面を考慮した混作型が存在し、どちらも主要目的の 1 つに農民の所得向上がある。観光都市であるポカラでは、このような組織による事業が開始される以前より、外国人観光客によってオーガニックという概念が持ち込まれていた。そしてこの概念は、情報源が組織か外国人観光客かによって異なっており、前者は各組織の概念に基づいており先進国で言われている「有機農業」に近いのに対し、後者は伝統的農業や非木材林産物も含めた化学的投入物を使用しない農業・農産物としてとらえられておりより広義に解釈されている。ポカラの観光産業では、この広義の概念を用いて、健康や環境に配慮するとともに、都市と農村を結び付けようとする活動が個人レベルで行われている。一方で、ポカラの一般消費者向け市場では、有機農産物と近代的農業による農産物が混合されており、オーガニックという付加価値もつかない状態である。現時点で一般消費者にはほとんど広まっていないが、有機農産物に対する外国人の需要は高く、また流通経路で生産者と消費者の距離が近い引き売りも存在し、関心があれば有機農産物を見分けて購入することができる環境である。

4. 有機農業・農産物の展望と課題

有機農業・農産物は化学的投入物を使用しないため、健康面や環境面における利点が挙げられるほか、ポカラでは外国人を対象にした販路開拓、関心のある人を対象にした顔の見える取引が可能であることから経済面でも効果があると考えられる。また、軽視されがちな伝統的農業や地域資源を利用して、格差の拡大してきた都市と農村を結びつける役割を果たすことも期待できる。世界経済が不安定であることから、外国にすべてを依存するのではなく、地域の特徴を活かした有機農業や、一般消費者の理解や関心を高めていくことが、持続可能な都市と農村の発展への鍵となると考えられる。